



教育学研究科
長崎大学 教職大学院

Graduate School of Education Master of Education(Professional) Program

NEWS LETTER No.16

ニ ュ ー ス レ タ ー 2019.2

教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月17-18日開催)

【プログラム】

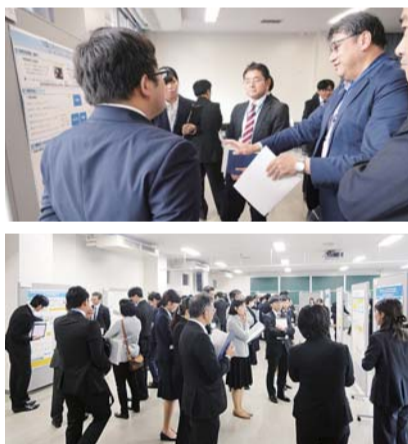
11月17日(土)
13:00~16:30
実践研究 長崎ラウンドテーブル(教育実践を少人数グループで聴き合い共有・探求する場)

11月18日(日) 教育実践と省察のコミュニティ2018
テーマ「新しい時代の教育実践をめざして」
09:00~10:30
教職大学院生のポスターセッション
10:40~11:25
教育学部教員、附属学校園教員、研究協力教員等によるポスターセッション
11:40~12:40
院生によるポスターセッションを受けての総括
コメンテーター
教育行政の視点から 木村 国広氏(長崎県教育委員会義務教育課 課長)
教職大学院の視点から 久保田善彦氏(学都宮大学大学院教育学研究科 教授)
13:30~15:30
講演 「カリキュラムマネジメントを通して子どもの成長を学ぶ
～小中一貫校における教師のカリキュラム経験を事例に～」
講師 藤江 康彦氏(東京大学大学院教育学研究科 教授)



本年度のフォーラムは、昨年度に引き続き「新しい時代の教育実践をめざして」をテーマに、1日目に「実践研究長崎ラウンドテーブル」を2日目に「教育実践と省察のコミュニティ2018」を開催した。大学院生のポスター発表は22件、附属学校・学部教員の研究発表は26件あり、参加者数は143名(のべ245名)であった。また、今日的テーマに基づき「カリキュラムマネジメントを通して子どもの成長を学ぶ」と題して講演を行い、参加者一同、最新の知見に基づいた理解を深める有意義な機会となった。

ポスターセッション



学級経営・授業実践開発コース 大吉 さやか

ポスターセッションに参加させていただき、たくさんの研究を拝見したなかで、自身の研究に生かしたいことや、教師を目指すものとして学びたいこと、研究について議論できること、様々な意見に触れ、視野を広げられる機会だと思った。新たに学んだことや見えてきた課題をもとに、今後の実践や大学院での学びに繋げていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 山口 大樹

ポスターセッションでは、教育課題を、実践研究を通して解決する院生や教員、附属の先生方の実践が報告された。教育委員会の方、現場の教員、研究する教授や院生等、様々な視点をもった参加者によって、質問や意見が飛び交った。発表者と参加者の距離が近いことで、対話がしやすく、実践研究について多面的・多角的に考え、議論し、深められていく。自身の研究で課題であった教科の指導について、体験を踏まえながら対話することで発表者と参加者の私の双方に学びがあった。私も来年、この場で発表することを想像するとワクワクする。子どもたちにより良い学びや人生を送るきっかけを与えられるよう、精進していきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 松井 奈々

大学院生、大学教員、附属校の先生、公立校の先生、教育センターの方などが同じ空間に集まり、議論を行いながら学びを深めていくことが非常に新鮮であった。様々な経験や専門性をもった先生方のポスターをもとに、様々な分野の人たちが質問や意見をしながら議論を行うことは、発表者、参加者とも新たな視点が生まれ、視野が広がる。お互いに学びが深まるいい時間であった。また、自身の研究をどのように進めていくのか、どのような実践を取り入れていくのかなど自身の研究を見直すいい機会であった。ここで学びを自身の研究に活かしていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 山口 真優希

ポスターセッションには、教育学研究科の方だけでなく、長崎大学の教授や附属学校の先生方等、教育に携わる多くの方が参加されていた。多くの方が予測困難な社会で活躍する子どもたちのために、とても熱心に発表を聞いたり、質問をされており、その姿に圧倒されてしまった。私は、先輩や附属学校の先生方の発表を聞く側として参加させていただき、たくさんの方から意見をいただくことができた。また、今後どのように研究を進めるべきなのかの方向性を定めるヒントも得ることができた。来年は発表者としてこの経験を活かし、来年もまた教育に携わる方々と深く学び合うことができればいいと思う。自身の研究に力を入れていきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 本田 花菜子

教職大学院ならではの実践的な内容で、これまでに関わってきた子どもたちのことを思い起こしながら身近な教育課題としてお話を聞くことができた。どの研究も新鮮で興味深く、「これは知らなかった!」「今後の自分の研究に生かしたい!」「教員になった時に使いたい!」と思うものが多かった。また、非常に質問やコメントが飛び交った。発表者と参加者の距離が近く、活発な意見共有ができて、教育について考えさせられる有意義な場であった。自分自身の研究につながる研究報告も聞くことができ、新たな課題等を見つけたことができた。今後、研究を進めていくにあたり、この経験を生かしていきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 野田 若菜

ポスターセッションでは、現在の教育現場における多様な教育課題から研究が進められていく大変良い学びがあった。専攻している分野以外の研究や現場の先生方の発表にも触れることができ、教職大学院生としての学びをどのように生かしていくのか考える貴重な機会となった。また、発表者と参加者の距離が近く、活発な意見共有ができて、教育について考えさせられる有意義な場であった。自分自身の研究につながる研究報告も聞くことができ、新たな課題等を見つけたことができた。今後、研究を進めていくにあたり、この経験を生かしていきたい。

ポスターセッションの総括

<概要>

ポスター発表の総括を、教育行政の視点から長崎県教育委員会義務教育課・木村国広課長に、教職大学院の視点から学都宮大学大学院教育学研究科・久保田善彦教授に行ってもらった。木村課長は、学校現場の視点に立って、学校が持つ課題に係るエビデンスや因果関係等の確かな裏付けに基づいた研究が求められること、学校の足元にある課題から見直したとき、グローバルなテーマへと広がりをもつ実践研究が必要であること、そのためには、学校教育にとって何が求められているか、何のために研究を行うのかを内省することが重要であることであった。久保田教授は、実践研究において、成果やデータ分析のみに留まらず、学びの本質に肉薄すること、大学院の長期にわたる実習では、研究対象の観察と分析のみならず、大学院生が自らの成長や変容に気づき、それらを自ら確かめることも教師にとって重要であるとの指摘がなされた。

学級経営・授業実践開発コース 小川 大輔

初めて参加したポスターセッションの総括を二人の方からお聞きして、ポスターセッションの発表を振り返りながら、自分の中で内容をまとめていくことができたと思います。総括は2部構成であり、前半ではポスターの実践研究の内容ごとにカテゴリー分けをされており、実践ごとの感想を他の実践と結びつけて話されていて、整理することができました。また後半は長崎大学の研究と学都宮大学の実践研究を比較することで、長崎大学にはない考え方を学ぶことができ、視野を広く持つことが大切だということになりました。このポスター総括で学んだことや、新たな視点を今後の自分の実践研究に活かしていきたいです。

学級経営・授業実践開発コース 田村 健太郎

ポスターセッションの総括を木村国広さん、久保田善彦さんに行ってもらった。お二人の話に共通するものとして「教育に対する熱意」に対するものがあった。教育の現場において実践のある先生方に教育に対する熱意があると認めていただいたことは誇りに感じた。その一方で、自身の研究を冷静な視点で見ることが必要であることも教えていただいた。そもそも研究を行う目的は何だったのか、自身の研究に対する評価は客観的に見て妥当なものか、研究を進めていくにつれてどのような面において当初の予定とズレが生じたのか、残された時間少ないが、今回のフォーラムで学んだことを活かして、意味のある研究となるよう努力していきたい。

学級経営・授業実践開発コース 浦川 真紀

木村さんの話を受けて、「人はなぜ学ぶのか」ということについて、物事を自分で判断できるようなるために、他人の立場がわかるために学ぶという点が残った。自分が学んでいなければ、判断するための根拠がないため、物事を自分で判断することができず、他人の立場に立って他人の考えを理解し、考えの多様性について理解するためにも、学び続ける必要がある。これからも、「人はなぜ学ぶのか」ということを自分なりに考え、自らも学び続けていきたいと思う。また、研究を行う際には、episodeとevidenceを明らかにし、何のために研究をしているのかという点に着目することを念頭に置いて、研究を進めていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 中俣 浪漫

ポスターセッションの総括の中で、ポスター発表を「言葉に体感に乗っていった」と評していたことが印象的だった。それは、その後読者からいただいた『なぜ研究をするのか』『その研究に価値はあるのか』など『そもそも何を問うのか』の重要性にも関連するのではないかと感じた。「そもそも何を問うか」上で自分自身の研究の意義や価値が確立していればそれについて語る言葉は自然と出てくる。反対にその点が不明瞭だと聞き手に響かない淡白な発表になる、ということだと理解した。また、それは教壇に立つ際にも「なぜ教えるのか」という根本を教員自身が問う続けることで児童生徒の成長を保障する教育の場を守り続けることに意味を感じた。

学級経営・授業実践開発コース 森竹 恭真

「何のために実践研究を行っているのか。」という言葉が、ポスター総括を通してとても印象的であった。今回のポスターセッションで取り上げられた実践研究については、どれも学校現場で取り組むべき課題に繋がっている。だからこそ、現場の課題や疑問について、実習校や大学など、様々な場面で時間をかけて考える機会が与えられていることは幸甚なことだと改めて感じた。今後は実践研究の総括に力を入れていきたいと考えている。そして、教師になったら、予測困難な時代の中で自分の実践研究が学校現場で生かせるように、子どもたちに何を教える、何を身に付けてほしいのか、明確な目標をもって取り組んでいきたい。

学級経営・授業実践開発コース 椋尾 宗太郎

「あしものある課題を大切に。」総括の中で言葉である。教職大学院での実習や講義において、「学び続けること」の大切さを実感した。その学び続ける土台となるのは、「自分のあしもの」とあるのだと話された。ポスター発表では、どの研究も「あしもの」の課題から生み出された。だからこそ、学び続けることに終わりはないのだと強く感じた。そして、私は何のために研究しているのかという問いを常にもち、実践研究を行ってきたい。学ぶことの大切さを子どもと共に問い続けながら成長するために。そのために謙遜に、そして真摯な姿勢で学び続けたいと思う。

講演

学級経営・授業実践開発コース 佐田 彩佳

本講演を受け、「カリキュラムは作り続けるものである」という言葉が非常に印象に残っている。今日では、時代の変化に伴い、教育にも変化が求められる。小中連携の下でカリキュラムマネジメントを行う事例を目前にし、学校を核とし、家庭や地域、更には異校種で連携が求められることを認識した。教師は、研究の意義や価値が確立していればそれについて語る言葉は自然と出てくる。反対にその点が不明瞭だと聞き手に響かない淡白な発表になる、ということだと理解した。また、それは教壇に立つ際にも「なぜ教えるのか」という根本を教員自身が問う続けることで児童生徒の成長を保障する教育の場を守り続けることに意味を感じた。

学級経営・授業実践開発コース 八尋 慶一郎

今回のシンポジウムでは、教師によるカリキュラム開発の重要性について学んだ。平成29年度告示の新学習指導要領では「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を見直すことが必要だと述べられている。そして、今回のシンポジウムの実践校や大学など、様々な場面で時間をかけて考える機会が与えられていることは幸甚なことだと改めて感じた。今後は実践研究の総括に力を入れていきたいと考えている。そして、教師になったら、予測困難な時代の中で自分の実践研究が学校現場で生かせるように、子どもたちに何を教える、何を身に付けてほしいのか、明確な目標をもって取り組んでいきたい。

学級経営・授業実践開発コース 山隈 俊

カリキュラムマネジメントを通して子どもの成長を学ぶというテーマで、様々な学びを取り入れることが出来た。カリキュラムマネジメントは最も重視される側面であり、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育の目的を踏まえつつ教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。本研究ではカリキュラム開発について実際の学校2校で実践が行われていた。研究には実践が必要不可欠であり、長期的に研究を行う事で深い信頼性の高い結果が得られる。自分の知識がまだ浅い部分もありもっと自分の知識がつけたいという思いが強く、専門的な知識や技能を指導していただくことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことには意義がある。

学級経営・授業実践開発コース 木本 和幸

小中一貫校におけるカリキュラムマネジメントの事例から、異校種の教師間、子ども間、教師と子ども間の交流の重要性が改めて確認された。我が国において、小中一貫校の数は多くない。しかし小中一貫とすることで、教師は異校種との連携を強く必要とする。そこでは、異校種の授業参観や、9年間の子どもを育てていくことからの多くの学びがある。9年間を通しての子どもたちの成長を描き、期間ごとにカリキュラムを見直ししていく。これは学校全体で行っていく必要がある。教科や学年、個人は縦横に連携する必要がある。私は教師になり、1人の子どもの教育に関わる中で、何ができるのだろう。校種、教科を超えた学びを常に求めていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 林田 太一

今回は、カリキュラムマネジメントが学校にどのような影響を与えたのか小中一貫校の事例から多くの学びを得た。本事例は、小中一貫校という点でも、教科の特性と指導の特性等を活かしたカリキュラム編成の重要性を指摘していた。また、小学校と中学校が一体化して環境下に置かれることで、教師どうしの学びに加え、意図しない学年の交流が図られていた。その交流を通して、子どもに成長の機会が与えられていた。小中一貫で教育を行うということまでカリキュラム編成時に意識されることで、様々な学びが子ども教師に促進された。小中一貫校に勤務しているかどうかに関わらず、他校種の教師どうしの学びを積極的に求めたい。

学級経営・授業実践開発コース 岩田 桂子

講演の中で、特に印象深かったのは、小中一貫校の事例であった。行政の必要によって一貫校は導入される場合が多く、教師の必要感によるものではない。また、一貫校は多くは決まらず、赴任する可能性は低い。しかし、現在は別々に教育活動を行っている小中間で、必要に応じて必要な教育の内容を組織的に配列していく。本研究ではカリキュラム開発について実際の学校2校で実践が行われていた。研究には実践が必要不可欠であり、長期的に研究を行う事で深い信頼性の高い結果が得られる。自分の知識がまだ浅い部分もありもっと自分の知識がつけたいという思いが強く、専門的な知識や技能を指導していただくことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことには意義がある。また、互いの授業を参観し合うことには意義がある。